# 文覺上人昔々物語（ぶんがくしやうにんむかしむかしものがたり）

全

136

春風居士考

春江漁史修詞

# 文覺上人昔々物語 全

上の巻ハ 院本の脚色を寫し

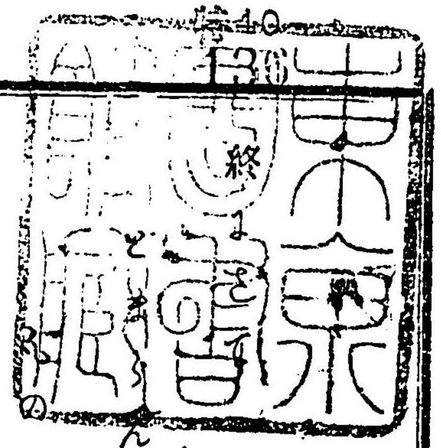
下の巻ハ 古書の異同を校し

文覺上人の實傳

袈裟御前の替死

東京 緑々堂藏板

定價金拾貳錢五厘



終

ありてなし
世はおとろへ
ふるも
ふらぬ
もの

列女傳等ゟ見えさる東歸節女の事い大ゐ袈裟ゞ物語ゟ似たをゞ題詞れのはりに爰に抄譯そ

東歸の節女といふい長安の大昌里人の妻ありけり其夫に敵あり常に狙ひけれども殺そとかゐはゞ仇人節女ゞ父を縛め女を呼て曰 汝ゞ夫い我大ある敵あり其夫を我に與へゞ汝ゞ父を殺さんと迫りけゞ女答ゝ曰 妾夫を救んためにいゝで生育の父を殺させん 速に汝ゞ先に妾ゞ夫を殺させん妾常に樓上に寢ぬる夫い東首に臥し妾い西ゞ枕とそよろしく來りて東首を斬りたまへと約して家に歸りつ思はく父に恩愛の慈悲深く夫に偕老の情淺のらゞ夫の命ゞ救はんとゞをバ父の命危ー父ゞ身を助けんとゞれゞ夫の身亡ぬんとゞ不如父を助んゞために夫を敵に與へつ我亦夫ゞ命に替らんとて 自 東首に臥て夫を西に枕せしめけり敵親入りゝ忽に東首を斫ゝ家に歸り詣旦ゞを見れば夫れ首にあらゞ妻ゞ首ゐり仇人大に悲ゝ此女父に孝あり夫に貞なり我いゝゃせんと嘆さゝ終に節女ゞ夫を招き長く骨肉の交をゐせしとぞ

春江漁史修詞

春風居士考

上の巻ハ院本の脚色を寫し　袈裟御前の替死

# 文覺上人昔々物語全

下の巻ハ古書の異同を校し　文覺上人の實傳

東京綴々堂藏板

定價金拾貳錢五厘

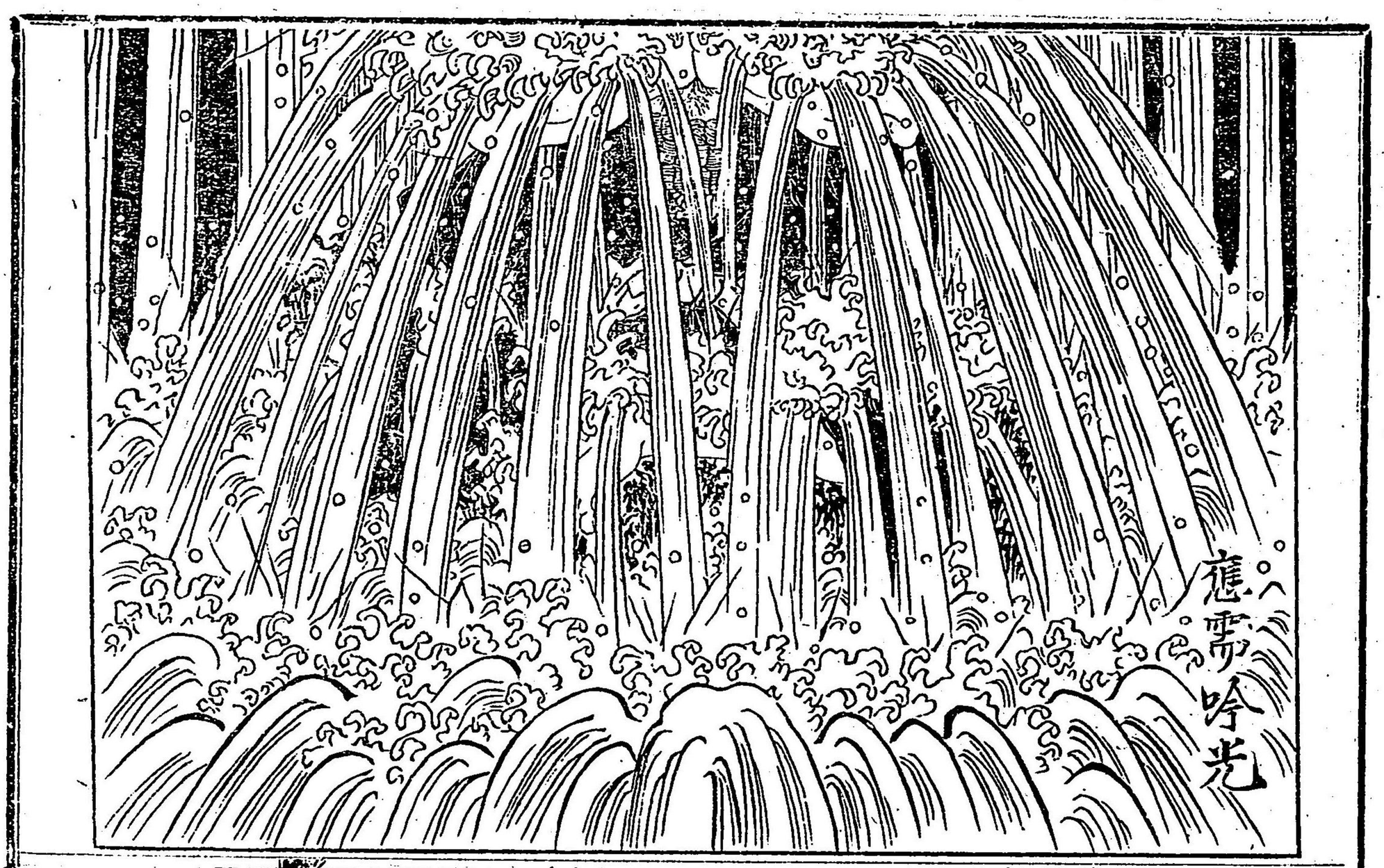
東京都立中央図書館蔵



列女傳等ニ見えたる東歸節女の事い大お袈裟ゞ物語ニ似たるを題詞れのはりに爰に抄譯そ

東歸の節女といふい長安の大昌里人の妻ありけり其夫に敵あり常に狙ひけれども殺ることかゝはゞ仇人節女ゞ父を縛め女を呼て曰汝ゞ夫い我大おる敵あり其夫を我に與へゞい汝ゞ父を殺さんと迫りけるゞ女答へ曰妾夫を救ふためにいゝで生育の父を殺させん速に汝ゞ之を妾ゞ夫を殺させん妾常に樓上に寢ぬる夫い東首に臥し妾い西ゞ枕とそよろしく來りて東首を斬りたまへと約して家に歸りつ思はく父に恩愛の慈悲深く夫に偕老の情淺ゝらゞ夫の命ゞ救はんとそゝゞ父の命危ー父ゞ身を助けんとそれゞ夫の身亡おんとゝ不如父を助んゞために夫を敵に與へつ我亦夫ゞ命に替らんとて自東首に臥て夫を西に枕せしめけり敵親入りて忽に東首を斫く家に歸り詰旦おを見れば夫れ首にならゞ妻ゞ首おり仇人大に悲く此女父に孝あり夫に貞なり我いゝゃせんと嘆さく終に節女ゞ夫を招き長く骨肉の交をおせしとそ

ありてぬ
世れおとゝをい
ふるも
ふらぬ
も


應霽吟光

## 上の卷例言

○頃者故人淺田一鳥等ご僧文覺の事を作りし院本を讀むにその意匠最巧にしくめづらかに覺もるまゝ愛玩措くあたはで趣向は原本をあらた先ぎたゞ辭のみ些少づゝ讀本樣にとりあし此編を綴りなしぬ

○原本にゝ文覺そあはち遠藤盛遠ゞ事のみあらぎ平宗盛○上總五郎兵衛忠光○熊野御前の念佛作治などの事を巨細に綴りたれどもそれゆまりに文覺の事にゝえうなく且紙數のえげきをいとひて大抵ゝ削とりぬされゞ原著者の意にゝ昔くべけれど拔狂言の所謂筋書とも見做したまひあゞさしく咎る人もおかちんゝ

○此書原本の隨に標題をつけんゝとも思へれど是ゝもとより下の卷ある實傳の世俗に所謂景物同樣に添たるなれゞたゞ昔のものをとりたる意を寓せんとて文覺上人昔々物語とゝあづけしありされゞ此題号にゝ二義ありといふべし

○此編純然たる讀本口調とゝ大に異りたりそゝ原本の面目を存せんゞた先にまとさらゝ如此ものしつ

春江漁史　誌るる





## 文覺上人昔々物語上卷

### 第一回　橋畔の勘當子

文覺上人ゝ初俗名を遠藤盛遠といへり父を遠藤將監茂遠といひ渡邊黨の一人あり盛遠少さとさより心さま雄々しくて武藝に秀ゞりさても此比平家權を攬て二十餘年威勢四海ゞ振ひしも運命漸次に傾さて源頼朝ゝ伊豆より起りて關東ゞ擊從へ源義仲も亦兵を木曾ゝ擧てその勢いづれも熾なゞ諸國にゝ合戰屢次ありといへども華洛の内ゝ猶穩なれど此比竣功し攝津國渡邊の橋渡初の式を執行はれんとそ比ゝ壽永二年三月中浣今日ゝ吉辰あれどとそ舊規ゞ照てその准備あり橋奉行ゝ源左衛門尉渡又介副ゞゝ遠藤茂遠孫て仰つけられしろどいづれも威儀を正して萬事を指揮を當下渡ゝ茂遠にうち對ひ「供物の規式相濟うへゝ豫て撰出されし老夫婦のものを呼出し吉例ゞ任せて速く渡させヤさるべしと詞の下快々と呼つぐゝ應と答て老夫婦曠衣ゞ容を改めて面前ゞようづくまをど茂遠近く招きよせ「橋供養の古例あれゞ夫婦共倡賀辭を演よいざ快々と促されて夫婦ゝ額つき「成程々々愛ゞき渡初を仰つけらきし吾們万刧未代まで朽ぬやう女房も祝ふて謠やれと橋の畔ゞ立並び聲をかしう謠ひける

二柱の御神たち天浮橋ゞ環曾天瓊矛を引提て蒼海原を搜りゞまひしその滴自凝島とヤとのやそれより傳とる橋柱かゝる折にもあひ竹の直なる道ゝ今とても飛彈の工ごの規矩をよろづの材々にうち亘し手釿始の吉日より今成就の渡り初陰陽和合の夫と妻相生の友白髮千代に八千代に礫石の巖とあれや岩楠の動ぬ例君ごの世ゝ万々歳の末までも愛ゞとのれ

春江漁史　修詞

とぞ祝しける渡茂遠詞齊く「両人とも大義々々よくあそ祝しゆしさを此うへハ竹柵を放し往來の人を通さべし
と詞の内鶴固の武士立蒐り埒の菱垣拿除れを待受たりし群集の貴賤推合揉合渡りしハ蟻の群るゝゐ異あらぞ茂遠
此体を見訖りて「いかゑ渡殿小人ご假舎に干て九献を始めしはん夫婦も來れと引連て大家相伴ひ入にけり浩折し
も長柄堤のかさよりして一個の姫媛を從へつゝ息喘と走來る隼人ありその容貌の嬋娟あるハ亦比ふべくもあらぞ
是内大臣平宗盛の嬶母衣川の女袈裟御前と呼るゝものなり當下袈裟ハ四下を回顧して「とてもなら渡り初を見
んものをと氣を喘たゐさても速き結了でハあるとうち呟くを侍女松ケ枝推禁めて「されバとよゐんぼ渡初ご結了
でも天河の渡さゑといふ心當ごおざんそる早うゐ尋ゐされぬ歟「ゐれ此暮の紋を見や三点星ゑ一文字ハ渡邊の家
の定紋這裏ゲ渡さまのゐん假舎ゐ極つたと見遣る前面ゑ人影そるゑぞ「那ゐそハ渡さまであらふごの「眞ゐ然う
でおざんそと歡ぶ中ゑも袈裟ハうち笑み「竟直地にハ拍子ごない恁々そるご合点歟と松ケ枝に囁合つゝ樹桙の蔭
ゑ身を潜ぶを左衛門尉渡ハ斯とも知らぬ心祝酒の微醉ゐていと心地よげゑ出來り松ケ枝を暫と見て「是ハさて
松ケ枝でとゐい歟何と思て來しとぞ「アイ餘りに音耗ゲゐいもゐゑゐん存問に參りました「袈裟ゲかたより存問
ゑやはて能う來てくをた而して些とや少許の路程ゐい十三里を練供裝脚ゑ實ゲ入らふいざ摩てやらんと戯れ寄れ
を「アレ歹い事を「是ごゐんの歹い事さて君よりの口狀ハ甚麼じや〳〵「アイ口狀ハ奴家ゲ直に裏さんと袈裟御
前樹蔭より立出をバ渡ハ大ゐ驚きて「ゐりやどうじや儞も來て歟と面はもげに見ゆるを袈裟ハ面を正し「ゐれ松
ケ枝竟口狀といひハせで今のやうゐ猥な事些慎むごのよからんと假意暗刺たる物越しゑ渡ハ傍よゑ「いや那松ケ枝
といふ奴ハ顔ゑ像合ぬ大胆者突然と側へ來て否ごゐる俺ゲ手を把て懷や背を撫いさう肩ゲつかへて麻痺ゲきれハせ





ぬ歟太股から頭痛いせぬ歟と一寸寄り二寸より竟肚の際まで寄をつたはて大胆ゐ奴でハあるといふ中ゐ密と放し
て松ケ枝ハ幕推揭て入にける迹にハ袈裟ゲ摩寄て「オ、それ〳〵御前ハ堅固行狀なれど這右手ゲびろ〳〵ととゐ
くゐ性の歹ん脈がらどれ此袈裟ゲ見て上んと緊と絞をバ「ア、痛い〳〵「オ、仰山にそのやうに嚇さんしてもい
ふ事ハいはねバゐらぬ橋の御用に邁ねバゐらぬとて別れさい三月も以前爾後ハ風の便も遠離り今日や華燭の來る
と歟翌や賁臨なさるゝ歟と待に月日ハ消去ゐりゐん忙くやゐはさんと思ひ暮せど氣も濟ぜ松ケ枝を幇助にて過
〻來さりし甲斐ありて逢ふ嬉しさハ嬉しいご閑えぬ情人の心やと怨嘆けバ渡ハ慰め「いはるゝ所理なり吾とて
も旦暮心に挂れども私ゐらぬ御用といひ殊ゑ同僚茂遠ハ物堅き侍びら〳〵と和いゞ情書も寫れぞ案てゞのり暮し
ゝご の既ゑ橋も成就して幸ひ今日ご渡り初我らハ儞ゑ渡り初どうぞ好夢ごの見せてやりさい渡も旅の憂散し木枕の圓
寐ごのち絞て貰ふた這手の味項領に覺えごのあると手を絞返せバ棹離し「圓寐ごのちとハよい手ゐ虚言口で宣ふほどゐ
可愛ゐらバ聲息い做やうもゐりさうゐもの變心のした所へ思ひかけゐう來たもゐゐ當惑の間ゐ合ざらけそのや
うに頭掉てゐさんしても餘り違もござんそまい此津國といふ土地ハ菲洛に劣らぬ江口里神崎とやらへも近いとの
と通はしやんした信憑ゑハ面によつぽど痩ごの見える「イヤ又是ハ興ごのる頼精かなゐるほど音耗せざりしハ俺ごの愆
ゐれ掌を合そ堪忍したまへ弓矢八幡大菩薩侍冥理他心といふものハ神もつて覺えハゐいゐれ物をいひたまへ
堪忍したまへ是ハ做たり恁いふても聽入ごゐいハ歟何とせう百年めじや死でのけふ切腹して首縊ふふ歟首絞てうら
腹切ふ歟「いや〳〵武士の刀ハ素破戰場の晴軍ゐ主君の忠義より外に刃ゑ血を塗ぬもの「とハいへ迚も情事で結
果ふ性命這川へ來と身を投て死でくれふ未來より分疏そる必其裏に俟てゐやといひつゝ立て行んとそる裳裾ゐ把

若總若「あをあう短氣な俟て賜べと禁るを掉切駈出るをやうやくよて抱禁め「どうでも死ぬる心かへ「ふんでもない事死で見せる」いや〳〵御前を先たて奴家いどうせう「どうといふたら勝手にせい「そんあふ奴家ゝら殺してと携り歎けゞ「最うよい〳〵「疑い舞たであらふ「是ごの舞いでよいもの歟「オ、嬉しやと寄添て離れごたるき風情なり遠藤盛遠い聚より事の情態を闕覗て柳の樹蔭ゑ立つ居つうつし心の肩にて息不覺に焦躁ゐるとい知らぜ這方ふてい渡吐息吻き「却も〳〵近年ゑ覺えぬ嫉妬僅ゐ二三月逢ぬとて悋性のあい人でいわる那七夕の牽牛織女一年ゑ只た一回の出會い銀河の水邊で且此やうあ嫉妬であらふといへゞ袈裟い背を敵き「又歹嘗を宣ふ歟と迭に戯れ睦みつゝ更に餘念もあき折しも茂遠の郎黨一人連忙しく走來て渡の前に跪き「渡初の式に徵出されし夫婦の者聚より俟せ置いへゞ御賞美を賜はり住所へ返しゆさんや又一來にい京都より飛騎自今到着し報知せいにい東國勢を防ん與富士川へ馳向はれし自方大に敗北し逃登りいよし其義につきて密談の旨いへば急きておん越下さるべしと主人茂遠よりの口狀にていいざ快々といひ楽て還りけり袈裟い本意あき而色にて「ヱ、好事にいせ善尺魔といふに渡も亦吃き「ありや行ぜゞあるまじ這假舍い吾休所松ケ枝に脚でも摩らせ俟たまへ面白き所へ魔ごの祟たと舌うち鳴して出てもく袈裟い背影を目送りて「必早う歸て賜べと伸揚り伸揚り望遣る後面に遠藤盛遠親ひより就勢に楚と抱締れゞ袈裟い吐嗟とうち驚き「あい誰じやと見かへりて「盛遠さま歟と掉離そを盛遠い猶抱屈め「遠望から瞻てをつたごのどうもならぬ〳〵怎抱着てい身骨ごの戰て怵へられぬ又惚まいもの歟楊太真いいざ知ふぜ本邦にてい衣通媛小野小町も及ぶまじ性命拿奴と綢繆るゝを推退て「戯事歟と思へど眞實でござんもおよう御合点あされい御前の瑞公い奴家ごの伯父さま御前とは從妹同士「さをゞそれも好し夫妻い從兄弟ほど肖と歟いへゞ幸ひの出會直に逃て歸るじやて「逃て歸てどう做たまふ「はて女房にもる「ム、那癖さまといふて上總五郎兵衛忠光さまの妹公にて美しい令正のあるうへに「薫い古臭くて歷果た思蒐た此情事伯母でも姪でも從妹でも狗兒でも猫兒でも魅入たからい妻よもる髮の膏油段絹衣の留奇南ふはさはもるほど猶堪らぬその美しい眼もとから潸然ど流るゝ涙を襞より那裏で吸てゐたと禍鬼の貢緣たる執着心離れごのたゐく見えけれゞ袈裟い涙に淪むのみいとゞせん術あかりけり折しも來蒐る父茂遠斯と見るより吐嗟と驚き走り寄て盛遠を撲地と蹴倒し踏飛し袈裟を護屏て立たる姿ふ盛遠いたゞ呆るゝのみ父い怒の聲高く「やをれ盛遠汝忠光ごの妹に相俱しながら從妹の緣ある袈裟に戯を伯母ごの聞まへ世上の饑一門の面を汚と盲語同斷の癖者親でいあい息兒でおいぞ七生までも勘當じや聾はあを奴あれども大切ある御用先血をあやそるい君への怕れ河伯を祀る橋供養助てやるい親の慈悲とつとゝ去いろを兵捫那放立よと詞の下軍兵捫簇々と走來て手に〳〵割竹うち鳴して快立たまへと促せども盛遠い些とも怯む色なく呵々と冷笑つゝ出てゆく今さら何と袈裟御前我もゐかゝる憂別身聞もつらき親子の中ゑはれ姿に眼を離さぬ遠藤武者い煩惱の犬を繫ぎし如くにて撻ども去らぬ戀慕の羈絆袈裟を隔て目送る父難波の名のみをつくし心つくしの橋柱右と左に立別れぬ

## 第二回　軍營の奇遇郎

源氏の兵勢まを〳〵熾にして頼朝の先鋒としてその弟 沸冠者範頼富士川の勝軍に乘して京師に馳登り義仲も亦勢猛く洛中に攻入りしゝど平家い終に拄得ぜ慌忙さて洛陽を落逃れど範頼義仲入替て滯陣も然ど遠藤將監茂遠いろの身平家の臣隷にあふぜといへども奇因緣ある瞞に義に仗て宗盛がたに馳加り手痛く戰ひて數個所の傷を

被りその子盛遠の妻葉の兄なる上總五郎兵衛忠光の宿所へ馳還り腹掻切て死せ是より先茂遠い素より源平二氏に屬せざるも平家ゞたの忠光に緣を組たる心より一家の肩を持んた処黨せしありといはをてい死後までの恥辱にあそとて媳葉をゞ忠光の許へ送り返したり加旃此忠光の妻國町い又茂遠の女なれゞ是をもおなじく拿返し全くうの緣を斷切りぬ忠光また心さを最猛くて義に勇めゞその身嬢に富士川の戰より病に由て洛に還り病苦日に彌倍といへども義心い些とも撓む色なく是亦源軍洛中に攻入りし日己ゞの家にて切腹して主家の難に殉しけゞ然程に平家の一門い悉く西海に落漂ふといへゞも清盛の女蝴蝶内侍のみい忠光の宿所に潜て渡らせたまひしゝゞ忠光切腹の後い妻國町ゆをを守護しつゝそゆはのとなく彷徨出れゞ漏も亦家に在と克はゞ此の如く一家親子兄弟忽地に或い死し或い四分五落よ離散せしい亂世の常習といひながゝ亦淺ましき情勢なり然りけれども遠藤盛遠のみい父茂遠の勘當を受ー後い敢て平家にも屬ゞまた源氏にも從はゞ浮浪の身を嘆く氣色もなく多方に姿を變洛陽近頭を徊徘そるを人その心を知るものなし有一日源氏の大將範頼の四條磧陣營の前を膏藥を賣行く賤き男あり聲高やかに膏藥の功能を演るやう「奇妙ゞ〳〵それ買たりやれ來たり諸國に隱れのない膏藥ゞ且功能を知らない歟聞たくゞいふべゝ癰疔に臓瘡軟瘡や腫物名もない瘰癧灸の疵に目の爛眸や瘃火傷に瘭疽撲傷や切傷離れる指でも腕でも一貼で奇妙ゞこ貼で不思議ゞ賣ての調法買ての福サア召せ〳〵と賣あるく聲に兒童ゞの寄集ひつゝ手拍子敲きて囃立るその聲い耳聾るなでいと眇し音を聞つけ陣所より軍兵捫紛々と立出て「あれ〳〵膏藥郎此度の合戰で自方に疲負ゞ夥ある己い又何やら大きな腫物瘡醫に生てをるゞ今いひ立し口狀のとはり一貼で治るといふ奇藥ゞある歟と問かけられて膏藥郎い冷笑ひ「さてその覺えゞあれゞあそ口廣く賣てあるく奇妙な証據を見せべいから





魂消さつしやるあと箱より膏藥を取出して「這青的ゞ吸出膏藥また此黑的ゞ發散膏藥腫物を吸いおろのな事直に人を吸よせるあれ〳〵先に立たる那乖涕頑童遣裏から吸せて見せべいと膏藥兩手に引はつて眞向になりて見せかくれゞ奇異あるかあ兒童い忽地糸に牽るゝ如くにてつる〳〵と手もとに吸はれて寄來るにゞ膏藥郎い最誇貌に「なんと奇妙歟鉄物を吸ふ磁石でも是ほど距離ゞ有てい克はぬ「成程々々是い不思議ゞ却又發散膏藥いどうしたもの歟「それい此黑膏藥且此やうにそれゞ証據ゞ見えるといひつゝ又も膏藥を引はつて兒童のかたへ措向をゞ夥の兒童い忽地に怕ろし〳〵と嘗きつゝ四方へ發ゞ飛散たり軍兵捫い大に驚き「あれい奇妙〳〵世に名藥もあをゞあるもの己ゞ腫物も衣物越しに吸せて貰はふ「それい些ひつかしい第一衣物に膿血ゞのついても歹い寢て直に貼たゞよい「否それでい何の奇妙あ綜いあい「又有てたまるもの歟「そんあら今の兒童を吸たい「はて那い指敎て置たのゞ「南無三一杯吃しをつた「俺らい過活ゞの吃つた方ゞの甘い〳〵「有やうい此膏藥貼さへそれゞ何でも奇妙切傷ゞ治るかよ「はて膽怯あら眼前で那位でも首刎て直に接で見せべい歟「それにい及ゞぬ何いとまれ痍負を遣ら忠治してから腹一ぱい自慢せいサア來いと軍兵捫い膏賣郎を引連て衆皆陣所へ入りにけり浩折しも斥候の軍卒遽しく歸來て「目今此軍營へ左大將國虎卿の賁臨也と報るにゞ帷幕の内より大將淵冠者範頼これに從ふ石田判官爲久悠々として搖ぎ出假の儲に陳弟子鋪皮擴げつ威儀を正して相待たまへゞ左大將國虎遠慮もなく傲然として儲の座に就き「却も今回範頼義仲の兩將六波羅に推寄忠戰の鋒鋭く竟に平家を西海へ逐下せし條比類あき勳功也就てい擊捕し平家の諸將逐一に姓名を寫記してさし出さるべし吾是にて一覽せんゼといはをて範頼頭を擡「今回の戰に勝利を得しと全義仲及小人捫ゞ軍功にあらゞ偏に天の冥助に由て也擊捕し敵將の首級夥ありといへ

ども自方に認識たる者あらざれバ即内府宗盛の嬶母衣川とヤス老媼を喚寄せ一々諸問はんと存じ既に使を遣していへバ程なく徵連れ還るべし櫂且俟せたまいかしと詞もいまゞ訖らざるに軍卒走來て目今是へ參上せりとの稟報につれ嬶母といへど今は棲家へ立還り寡婦過活の衣川袈裟といふ名もまはゝしき女を伴ひ立出れバ石田爲久瞪爾と見て「徵るゝは衣川一人あり女は何故に同道せしと訊れて袈裟は顏を擧げ「されバ御覽ぜる如く老齢の母あれバ途を急で倘傷我慾もあふん歟持病の癪でも發らふ歟と心もとあさに御前の畏れも顧ぜ相伴て參りしゞの御用の趣仰聞らき下さりませと伺ふ顏に愛敬は露と含ぬる海棠の溢れかゝるに異るらぜ爲久はうち頷き「徵るゝと他故にあらぜ今回六波羅にて擊捕し平家の兵捫名苗氏定のならぬもゑ衣川こそはよく知つらめ首級を一々示さん程に詳細に申立べしといはれて潑と赫く胸を衣川は拊下て「何事歟と思ひしにそれゝ何より易きおん用御家門はいふも更也譜代の郎黨昵近外様末々の諸士に至まで熟と認覺く侍るあれバつと〳〵申上べしと聞くより爲久士卒を見かへりく「それと仰そる程もあく嬲く首櫃持出る先最初の斬首は年れ齢は四十過ぎにく厚鬢の色白く頬髭逆立く怕ろしげあるは伊賀平内左衛門にく侍りといふを爲久はのうへをまゞ一年彌並の戰に眞先苑て懼り武者敵の多勢に割く入り怯まぜ去らぜ抑さし手効の信標ゝ向ふ傷匿れ紛れも荒岡八郎信安にこそ侍りといへバ同じくそれと寫とめたり次に持出る色の黑き熊代五郎白きゝ即白石將監青きゝ青柳栄摘の一黨にく侍る也其他最上伊藤武者雜兵仂武者ゑ至まで殘らぜ認識て侍るあると詞續きも淀みあく水を流そる衣川濁れる休もあらさるにぞ國虎ゝ事の爲体を熟と視て「然るにても上總五郎兵衛忠光遠藤將監茂遠両人戰死せしと聞つるゞその首級ゝあらざるやと問れて範頼聞あへぜ「戰場ならバ自方の兵捫我先に



と首捕て手効を顯そべかりしゞの他們ゝ宿所に引籠り潜に生害したるよし然れバその首級も由縁の者あどや拿匿せしにぞいとぜらんといふに國虎頷きて「有理々々その由縁といふに就くゝ茂遠ゞ妹たる此衣川訊問べき仔細ありといはぜく範頼些とも疑議せぜ「それ爲久両人俱に召連れよ國虎卿にゝ且おん休息有く然るべしと物に躁ぬ大度の軍將卒とバかりに國虎を案内つゝ陣營の内に入たまへバ大家も屬添く入たりぬ然バ又盛遠の妻蕭ゝ兄忠光と舅茂遠ゞ切腹しく身亡りし首級を密に包袱に推裹みく館の内を潜出つゝ志そかたへ葬らんと柔弱き力に重き荷も人目をつゝむ磧路陣營近頭を行過るをそれと認めし軍兵捫皆來いく〳〵と走り出つ前後左右より把捲く「あんと見た歟姸顏でゝあゝ歟「顏あふ風姿あら復とあるまい肥豐的うまし〳〵と戲れ范るを蕭ゝ手頭と磧とうち拂ひ「女と侮り何とあさるゝ些急ぎの用われバ其處退て通さんせといひ棄て行んとそるを「どつあいならぬあんと各位ぜう思やる這奴を樹蔭へ連て往く姦淫でゝあるまい歟「それ好かふふ善ゝ急げゞ我先にと群起范るを蕭ゝ彼此遮攔る拍子に肩より撲地と落さる包裹一人ゞの手逸く推開て「ヤゝ是ゝ忠光と茂遠ゞの死首に極つゝ今僉議最中の品逸く御前へ捧上んと抱て行んとそる腕ゝ拿箸あらぬ〳〵と搜駐れバ「ヤァ面倒あと踏飛そを倘も遣らじと牽戻せバ軍兵捫ゝ大ゝ焦躁「手緩し〳〵擊殺して引たぐれと一齊刄を拔連て斫て范るを「心得たりと蕭もおなくじ拔合せ丁〳〵磧と斫結ぶ心ゝ彌猛ゝ慥れども間隙もあく八方より斫込む刃尖受損じ數個所の深痍ゝ眼も眩み撲地と其首ゝ俯輾べバ軍兵捫ゝ踢倒し〳〵包裹の首を奪略り背後をも見ぜして陣所に走入る斯とも知らぜ彼窩藥郎ゝ「御用ゞ濟ざらおん暇ヤスと呼とりなぞら陣營の内より歸りゞけ負傷人を見るより喫驚して「呵呀儞ゝ蕭でない歟あんとして痍を負さと問へど答もあらざぜ遽しく慌撈りて准備の藥吹込つゝ耳に口よせ「蕭やい〳〵と呼活られて

眼を瞎開き「ヤ、盛遠さま歟「ヲ、夫じや〳〵「否その夫といふとゝ奴家いどうも「开と又なせに「さしゞとよ御前ご不興を受さまひ家出なされさその迹にて見公茂遠さまご兄さまへ奴家を返して「ヱ、それで歟然もあらん〳〵其事もおん兩人の切腹も人の傳話に聞しゐゑ姿を變し源氏の陣所へ入込で首を奪返さんため來りしに甚麽ある事歟おん二人の首い陣所におきとの風聲「サアそさい臨終のふん遺言に必敵の手へ遞與そあ密ゐ墓所へ葬れよとありしゆゑ今這裏まで持て來しを軍兵捫よ奪略られ淺ましや此深疵と聞くより忽地磯と怒り「あに軍兵等がはて憎き蟲奴捫蹈込で片端から殺散し首拿返さんぢいで〳〵と敦圉猛く跑出そを「あれ俟て賜べ盛遠さま爺公の勘氣に家を出彼此に漂泊たまひてもその短氣い治らぬ歟那大勢に單さ一個何はと掙扎さまふとも拿返されぬそのうへに身の破滅ゐあるといふ証據い奴家ゞよい摸範克はぬ緯とふぼしめせ只何となき休にもてなし便點をもて拿返そ深念して賜はれかし緣ゞ斷ても强顏ても奴家い御前の事許寐ても寤ても得忘れぢどうぞ今一回逢さいと思ひ暮しさ念力で御顏い見ても最う死ぬる終臨の際の別にさへ夫よ妻といふ事のならぬい甚麽した前生の因果歟業う淺ましや悲しや〳〵と歎く聲さへ息切て最期近くぞ見えにける盛遠も眼を屢瞬き「でりした〳〵是まで優しき詞も被ぢ强顏あたりし在下ゐ環會しを幸ひよ積る怨をいふべきに然いあくて真人を保庇深身の異見歹くい聽ぬ過分ぞよ然りあがら今い危き儞ご性命父兄の詞を背きよしや夫よ妻といふとてもその益あし現世の緣い薄くとも未來で伉儷ふとあせ思はぬ「然う思て下さんせゞ兄さまのおん詞にもあふて嬉い〳〵最はや心に挂る事とてもあけをた未來も迷はぢ千万稔も俟てゐる必違ふてたまいるゐ憑む〳〵と諄返そ詞に哀彌增れり折しも暴可に人音そるにぞ盛遠い突立あがり負傷人を謎屏て疾視つゝ仡とうち見遣りし那方より蒲冠者範頼左大將國虎石田判官爲久をうち伴ひつゝ立出たまひ「ヤア〳〵盛遠近く參れと聲被られて驚きしゞ假意落つき「ア、否小人い然るものにてい「あいといいさぬ茂遠ゞ倅とい此爲久ゞ殘見しゝもゑ既にそれと裏上たれゞ我君にもよく知食れたり疾謂見しへと歷着所爲も權威に是非あく容を改め跪々た爲久い軍兵等ご奪ひし首級を大將の前に推居「目今女ゞ持來りし此首逆ておん搜索の忠光茂遠ゞ死首ゐふんとヤせども事定のあらざる隨ゐ衣川に檢めさせい所肖ても像つかぢとヤせゞいかゝ計らひヤさんやと伺へゞ範頼頷きたまひ「聖討るゝい時の運亡骸の耻辱と惜と是みゐ武士の常習あれゞ敵の手に遞與さじと深くも匿そほどの者け範頼ゞ陣營近く虛々として持來らんやういあし衣川ゞ鑒品に違はぢ定て名もなき雜兵の首におそあらんぢふん女に返し與ふべしと宣ひつゝ薫ご体を熟と視て「見ぢ痍茂遠ゞ首と吾ご見た眼い違はぢ急ぎ兩人ご名を官標よ寫誌ー獄門よ晒しゐゞ殘黨捫の見懲しならん「ふん詞よいあれども年久く平家に仕てよく認知たる衣川ご詞を用ひぢ稀々ゐ他等に對面ありし貴卿の詞を証憑として大路に曝し倘贋首に決らゞ鹿忽の成敗源氏の不僉議と京鎌倉の笑柄とあらんのみ名もなき首を葬るべしと盛遠に吩附るも宿緣ゐあそゐらめと寛仁大度の惠の辭ゐ阿とぢのりゐ盛遠ご二個の首と推戴けゞ臨終の負傷人も掌を合せ「冥加よ餘るおん好情と歡ぶ顏ゐ盛遠を名殘惜げようち見遣りうち見遣り眠れる如く息斷たり國虎い默然として始終を聞てゐたりしゞ直躬と立て士卒を下知し「そぢ盛遠ゐ繩かけいと劇しき辭よ左右より其裏動くあと立莵るを盛遠い事問ふ暇もあらゞあそ淪で捻る腕投又拿付くを膝車左手右手へ投つけれゞ國虎い大ゐ焦躁「ヤア手向ひ歟「否手向ひい仕ら絲ぢ繩被るべき節身よ取て覺えあし「覺えなしとい白々し現前平家よ黨したる親茂遠ご戰死

子の分としていろで他所よや見て過さん顧ふゐ姿を裏して徘徊し由斷を覗ふ癖者と視認しゐる繩被るぞ僻事歟と問くより盛遠氣色を正し「親子兄弟敵自方と引別るゝは武士の常也茂遠在下は在下父子ありとも心は格別況や先つ比勘氣を受け他人とありしうへからい平家ゐ從ふ謂ゐし弓矢神も照覽あれ聊別心いはぜと誓を立たる一言ふ國虎始めてうち頷き「實潔き返答也それよて吾胸も晴ゐく霽たり就ては改てやつくる一議あり今回の合戰ゐ平家の一門悉く西海へ逃落たれども蝴蝶內侍はいまゞ輦下ゐ留りあるよし慥ゐ聞けゑ此內侍は猶以認知れるものゐし汝は六波羅へも常ゐ親く出入しものなれバ熟知りつらん判官と心を合せ佐と僉議を遂べしと退引ゐらぬ權柄歷ゐ只得仰を承引く折しも立出る衣川は袈裟を引連れ大將の前ゐ手をつゐへ「最はや御用も侍らぜ両人ともゐゐん暇をといふ間もなまめく袈裟ゐ姿を一目見るよゑ盛遠が又も身ゐ染む戀風ゐ氣も魂も浮をつゝ贍つめゐる眼色をそれと曉得し衣川女ゐ眼もて密と知せ會釋して立歸るを惜へ難て衝と擘寄り支ゆる母を推退突退け袈裟ゐ袂に拿着を爲久中ゐ推隔て「おん暇の出さるゐ何を躊躇綽やゝある快立還れと逐遣をて虎口を遁れし母と子い慌忙つゝ歸ゑ々り

## 第三回　閻王堂の奇禍

鳥羽街道の左尽頭ある村里の三味ゐ年古さる閻魔堂あり安置そるゝその丈六尺有餘の石像なり堂の左右ゐゝ夥れ石塔苔蒸て草離々として路去りあへぜ白日さへいと物凄きゐ石田判官爲久の郎黨關原兵內ゝ平家の落人蝴蝶內侍を搜索んとて家人引供し夜を侵して來る途も閻ゝあやゐし芒原を推分々搔退け歩みゑ「家來捫暗くて路を誤り し歟行ども〳〵草の中這處ゝ何といふ土地であらふ「されゑ前後ゐ石塔ゐ見えまそをバ田舍の墓所でござゑませう「道理で鰐燒やうな臭氣ゐそる而て此高いと何さ石の閻王歟あんざゝ厭ゐ土地へ出たと薄氣味歹げゐ主從顏を見合せて「且那湖情い事でこおざりませぬ歟「いかにも氣味ゐよくゐい這般土地に脚を駐ぜと街道筋を索て見ん衆皆來れと引連をて急歩ゐて立去りけり然バ又蝴蝶內侍ゝ平家の一門都を逃落し日潛て忠光の館に入りさまひしゝゑ憑む樹蔭に雨漏て敢なく忠光腹搔切て死しさをバその妻國町に佐けられ熟れぬ旅路ゐ氣も細り人視をつゝむ夜の郊野露踏分てやうやくゐ閻王堂近く辿り來つ杖を駐先て膝拊さまひ「實や人の久後ゝ定めゐしとていひゐぐら二十餘年の春秋も花と榮えし平家の一門今亡る時節ゐや落を落て西海の波ゐ漂ひさまふさへいと歎かはしきそのうへに又も源氏の両大將擘手ゐ向ふと沿途人の風聲を聞からゐいかゐる憂先や見さまとんと思へゑ悲しや湖情やと歎のせさまへゑ國町も共侶ゐ漏るゝ泪を推匿し「又ささぐりゐる事許世の浮沈とある常習一旦落を落さまふとも夥の公達恙ゐく座まそうへ武勇捷れし兵 捌周副あれバよしや源氏ゑ又寄さりとも然まで自方ゑ敗ゐるまじとかく大切ゐるゝ御身のうへ那裏ゐゐりとも忍バせまるらせ江湖の擾亂鎭りゐバ跟隨して參ふゐん何事もゐん苦ゐ儆さまふなと眞實見えていさむる詞に激されさゝ國町を幇助ゐて雲時路傍ゐ休歇さまふ浩處ゐ街道筋を索尽して息喘と立戻る兵內ゑ眼速くも主從を見つけつゝ「さてまそ國町汝ゑ屬添をるからゐ內侍ゐ極つさ尋常ゐ遲與せバよし異議に及ゑゝ單た一擊あんと〳〵と詰寄をバ國町ゝ冷笑ひ「事をかしや毛青年奴汝ゑ如き樹葉武者幾百人來さるとも苦とも思ゑぬ國町ゑおん伴しさる內侍さまを望なゝ首から先へ置てゆけ「這女呂才奴ゑ假廣言その頷の根を斫下げんと罵りあへぜ斫つくるを國町閃りと身を避し刀を拔て優らぜ劣らぜ打合々々斫結ぶ兵內を擊せじと夥の家人刀尖汰ひて擊て蒐るを國町ゝ事ともせぜ忠義に凝さる太刃頭ゐ殺捲られて齊一撥と逃出そ

を通さじ通らじと靡立々々那裏までとも追てもく迹よ内侍ハ唯一個「危險々々國町長追無益ぞのし戻て賜べ還さとかしと呼さまへども應るものハ松吹く風のみ寂寞として音もなし前向より小提燈さげて歩むハ袈裟ゲ母衣川常よ來熟れし路邊と何の怕きもあた壁の微々聞もをバ何物と問近く寄て指舉る燈光に顔を見合せて「ヤ、儞ハ衣川でハない歟「是ハさて内侍さま歟ても却もおん久しや今回の騒動ゐ姪の國町ゲおん隨從して立退さと聞ましさごどうして這裏よおん單獨よて「さきバとよ今ごたまで國町ごの廚副をつたれど源氏方の追手に撞見追蒐て遁たるごの倘や怪我をせねとよい「それハ危險い然りおがら女流であそあれ精悍しい國町滅多よ輸てハをりまそまいといふ折しも又も八の跫音響よぞ衣川ハ發と驚き「又も追手歟何よもせよ認着ふきくとおん大事幸ひの閻魔堂櫂且く這首よと手を掖て石像の後に潜び情態いかよと張ふに國町を家人に防せつゝ引返したる兵内ごの四下うそ〳〵見回して「ハテ面妖ゐ今まで這裏にをつた内侍那裏へ逃た那畔路を横さまよ走た歟たゞし前向の松原歟否々高ごの女の脚まざそを程れ間ハおいごのエ、聞えた這閻魔王の背後に匿きたに相違ゐい掴出さんと立蒐れバ突然と出たる衣川班白の髪を亂蓬々的に掉みざし杖を俊手に直躬と立疾視たる爲体夜視よハいと怕ろしけきバ兵内ハ吃驚して脚ハ戰き身と慄へども應せぬ顔よて「ヤイ老婦の幽靈奴その怕ろしい面貌ハ慳貪邪見の報よて得浮まぬ歟不便や〳〵此兵内ゲ佛号誦てやる程に迷ひを露して快々消よ「何じや這老嫗を幽靈といとて慮外ゐ奴三千世界の老若男女死で冥府へ赴くとき渡ふで克とぬ苦途の住人三途川の姥とと我事之下に居らふ頭が高い汝も罪の決た大惡人地獄へ遣るに間ハおいぞ「そきハ何とも迷惑千万先這兵内が罪といふて家を燒き人も殺さき物一隻偷ゞ覺えなしそれを地獄へ「ヤァいふ勿〳〵汝と正しく蝴蝶内侍を捜索あるくでハおい歟却も見徹し知らいでおらふ歟その内侍と生得善



心深くして哀憐に富みたまひ豫て佛果よ至らんとを願ひ晝夜の念佛誦經怠りたまと称ゑ閻魔王とを知食し俱生神の金の帳よ死ゐぬ先から寫てあるその内侍を追手の兵内焦熱地獄へ墮とべしと評議最中「ハァ、悲しや絶がたやヤレ熱い〳〵「ヤれき〳〵まゞ今の事でハないぞ「成程然うじや焦熱と聞たゆ忽地臀から火の着やうよ思ふたイヤおん姥さま追手に參るゆ私事でとおざりませぬ主命是非に及バ称ハ閻王さまへよきやうにおん執成をどうぞ焦熱ゲ脱れたうでざりまそ「そんあら内侍に撞見たりとも知らぬ顔で見遁を歟「何れ捜ーませうぞ「楚と追手を廢にして回る歟「ハテそれゲ主人へ科とありく首刎らるゝとも焦熱にハかへられぬ「然ふバそのとはり閻魔王へ愬て釋してくきふ「有がさし〳〵おん慈悲深いお姥さま御恩ハ必忘れませぬ最うお暇を申しまそとやうやく立とも脚ハ戰〳〵搖りく腰を撫まつゝ大息吻てぞ還りける迹見送るうち笑ひ「さても鈍い奴でとゆるいぞ内侍さまおん出なさを是のら我家も近々れバ必徐おおん伴して「ととい〳〵國町とどうせし歟まゞ見えぬと心もとない「實に然うでざりまそといふ間も有せぞ又も聞ゆる夥の人音「アレ〳〵何をいふ間も危い〳〵卒快々と御手を曳畔路傳ひ急ぎつゝ我家へまそと還まけれ最も危き事ありー後にて聞々ば國町と兵内ゲ夥兵と數回劇しく戰ふてその身も亦數個所の傷を負ひ竟に草莽の露と消しとぞ此夫にして此妻あり聞者感禍を絞りしとおん

## 第四回　幽居れ頂死首

衣川と今春暇を乞く鳥羽里ある幽棲へ立還りし後ハ袈裟と俱に引籠り世を果敢ゐみく銷光ゐる女主の軒さびく訪ふ人さへも最罕ゐまと比しも秋の正中よくいとゝ淋しさ嘯昏時衣川ハ餘所にと往くいまゞ還らぞ袈裟と寂寥に堪雖つゝ女衒を引連れ緑頰に立出く四方の風色をうち眺め「那山々に草木の花の咲亂きしと昨今のやうありしゲ樹

々の消も色何さくとや夕風の身ゐ染むよつき傳見れば渡さまと逢初しも最う三年大前歳の本月適今日ゞ新枕思出せば差かしやそれで此中別をしあに諄々もその事をいひ出く必その夜と早う來く下さんせとの約束をよもや忘をとなさるまいと嘲つを女衒ゞ聞あへも「アヽまゞ日も暮ぬよ忙しないよん加減なと宣ひかし而たゞ心れ懸もおん道理渡さまの早う賞臨あさる〳〵呪術をいたしませう倘渡さまのおん段絹衣歟短掛を領くと置あさをぬ歟「あるとも〳〵中單の華美袈衣脱でおん還りあさをたが「そをさへあをば竟出來ると女衒と精悍しく受拿く一室の内に准備して「おを此浦團を恁舗て枕二個をひとつに寄て上から件の袈衣を被た所ゐ兼た形姿さて此麻環の絲は端に針を穿て此小袖へ恁縫着て置とさい殘憐い人ゞの手練皆られわくせきとして來るといふ意そをと〳〵奇異の呪術聽て効驗を御覽とませ「いゝさま是い理らしき呪術利過て嬶々が道場ゝら下向あさをぬうち渡さまが見えさまひいせぬ歟曉得られてい恐いぞや「恁あつて親公どころ歟呵ゞれたら呵られ次弟迹い野とあを山となれ心の隨よ做たまひかし今宵い大切の三年忌よう弔ふて賜とりたまへ翌い定先て色真青斬き た首を見るやうでがあゞざりませうと咄と笑ひし戯言も蚍が知そる兆にやあらん「アレ〳〵那裏へ小提燈家刀自ていおとさぬ歟「真に嬶々認着らをくはむつゝしゝと袈衣を設置し一室の紙障礎と建切り奥の間へ主從が立潜ぶとも去らま弓腰を伸〳〵衣川諸折戸開て内に入り提燈弗と吹滅ー刂「誰も居ぬ歟女い在らぬゝと呼とり〳〵四下に心を配まつゝ心徐に襖戸の匿樞を密と放し推開て頓刂々ば内には蝴蝶内侍惆然として潜みたまふ衣川い聲うち悄先「人視もあけをばよき折のふ些とおん心を散したまへと理なく出し進ふせて上座ゐ推直し「宗盛公におん乳を進らせし此姥由緒ありといひあがら相國公のおん女世が代の時で伽るあらば見るも懼恐さまの草舍へ賁臨いあるまじ先に源氏に浮世を狹先らを空飛鳥草叢に聚嘲く蟲ゐさへ潜ばせたまふふん惰態思回せば痛はしさよと酸鼻ば内侍もおん眼を屢瞬たまひ「いやとよ自家い有るに甲斐な先女の身只一門の人々いゝゞあらせたまひしと案そるい此事許「その事いおん發心あらせたまふな道場詣に假托く世の傳説を聞合そるゐ御一門い恙ゐく西海ゐおん下向ゐりしとのよし機を視合せ此姥ごおん伴して下る計較近さゐ宗盛さま敎盛さまゐも逢せ進らせん开をおん娛みに今且く潜せたまひかしと慰先勵る折ゐそゐを外面にて遠藤武者盛遠おん出ゐりと呼ぶ聲を澈と驚先立あごゐ慌忙きて簷の壁樹へ内侍を潜ゞせ進らせつ襖建切り前後回顧々々然らぬ体ゐく出迎へば遠藤盛遠遠慮會釋もなご刀門挿よ跨へて胸突出しつ坐に直り「叔母者久しう逢ぬご變る綷もおざらぬ歟「何日にあい温和ーいその詞叔母を存問歟但い要でも有ての綷歟「否々まんざふ存問許でもざらぬ要といふたらおん身の女袈裟御前の事に就て「袈裟ゞ何とした「はてそのやうに侮負たまふあ渡邊の橋供養に渡り初やら惚初やらいひ出して見たゞとんと溫舊それから手を替脚を納を直に口説おん身に憑む多方に擧行く試れど滑々油々地と塗箔で鰻鑼夾ひやうに自家も吻と精魂ゞ竭果たそれで今宵い主意蠶の口を括て成る歟あふぬゝ斷然とした返答を「チヽ聞たくもいふて聞さんあらぬ〳〵ぎんどあふぬぞ「ヤァあんと「却も側はいみじき惡人かあ偏ごの與にい爺親此叔母ご與にい兄將監茂遠刀禰弓箭家の義理に迫り五郎兵衛忠光と迭に舅婿の縁を斷り他人とありて平家に驚し潔く戰死あされたも道理をいへゞ父に替て和主ごのそる該這方の女兒に懇暴して勘當受たを幸ひに平家方やら源氏やら磯にも着ぎ波にも乘ぎ存命る腰拔侍冥途に座ぎ茂遠刀禰嬉しからふ歟憎からふ歟幼少ときから弓箭の道學習したい何の與「まを頷の勞る〳〵にいはれざる異見ざてそを聞にい來ぬいよ〳〵袈裟をくる〳〵意いござらぬ歟どうでも懇歟惡あら両人の爲にあ

ちぬ「あに袈裟をやらぬとて叔母が爲にいどうしてあらぬ「それ理由いふて聞せん盛遠今日參りしい私事あらを辱くも上使ざふと一聲高く呼はりて暴可に威儀を搔繕ひ然も倨傲に上座へ進ぜ叔母い心に倘やと喫驚しあごのらも「さてその御上意の趣い「おを老婦よ汝許への上使であい袈裟も其首へ出せ列て置て一緒にいはふ「所しい事あれども上使の御意い背かをまいおれ女早うと呼立られて袈裟いうち騒ぐ胸を鎮め〻く手をつゝぜ盛遠いうつゝもなく貪視て「却も〳〵美艶じや標致といひ風姿あら拙者首たゝ上洛したも無理とい思はぬ「おを〳〵御上使さま奴家母子へ賜はりし御上意い「成程々々平家の一門悉く西海へ下りしに蝴蝶内侍單一個いまゞ洛に駐りしを故捫母子舍匿よし左大將國虎公聞出され此盛遠と石田判官に分付僉議の爲遣された左大將殿の上使是ぞりい倒の滑々油々て辯ぬ綽快率出して遽與よと迫つけられて驚く母女い情態を知らざを〻「おをい思ひもよらぬおん咎内侍さまを舍匿しとい痕迹もおき僞言「いよ〳〵舍匿慣ぬといひ募れ〻家搜をるぞ「うをい左も右も覺えあぬ身い何處までも「母子とも意地の硬い泣面かくあと罵りつゝ衝と立て小袖を設置し一室の障子に手を掛れ〻袈裟い推禁め「ならぬ〳〵此障子の内には男子達に見せともむあい羞しい綽ぞある「おれ女見せともむあいといふとおい一倍上使の不審が立早う開て見せヤせよ「嫻々のなに宣ふ這裏見せてあるもの歟「然程に匿も此一室且よいい迹での僉議それまでに此壁樹と襖戸を開んとそれ〻母い推退け「あらぬ〳〵此内い親にも子にも見せとむあい大切の東西「嫻々何程大切の東西にもせよふん目に被て疑猜を露したまひてや「此子ぞ滅法な「ム、ハ、、些と然うもあるまい是ゞ悪さに今もうち諦ての商量袈裟と夫婦になれ〻嫻あり甥あり叔母なり妻あり夫なと命輪際まで内侍を匿舍課そる吾心底今でも悪といはい石の韓櫃鐵の櫃より堅いものにあるゞ尋思做換る心いあい歟「侍のやうにもない一度悪といひ斷たをば那處までも悪じや〳〵「悪なら這裏をと又壁樹に手を掛れ〻母い取携り「おれ待たろの襖ぞの開と母い直に自害をる殺さふと助やふと女傭の心ひとり且悪といふてたも「夫でもそれい「どうでも悪歟「悪おら襖を「おれ女どうじや〳〵と迫寄られ退引ならぬ難題より母の自害と聞く悲さに胸を居「そんなら悪でぞざんをといひも果ぞに伏輾ぶ盛遠い得意貌にて「いたう骨折てあゝまでい做課せたゞ吾に悪といふて渡いどうをる意ぞ悔りをあ知てゐる叔母の命を助けん爲嘴頭ばのりで調合ても渡奴を生留てい吾心ぞの清ぬ「ナ、その事は此母も三年前ゝら知てゐるどうあまと科附て「科も絲瓜もいらぬ迚もの綽ぞ清々地と渡奴を擊放し那奴ゞ首を島臺あて闘心のあい祝言今宵の中い過さじと裾引折て走出をを袈裟い引禁め「且俟て賜べ悪むとをを穏ぞ出て露きしうへのらい匿しいせぬ然までふ思詰さまはゞ今宵三更の鐘鳴る前に忍で渡らせたまふ該あるを幸ひぞ毎のやうあ酒を勧ぞて就睡ぞあ燈火滅〻く闇黒ぞ那麻瓊あぞ閨房の案内障子の出で一思閑殺いどうあらふぞ「然うをを這方も勝手併來るぞ違ひいない歟何あいさせ我物にして寐るまでい由斷のあらぬ口頭約束渡奴ゞ首擊までぞ這叔母を人質夜半れ鏡を櫂と閉と繰頬より潜込む必契約違ふあと詞詰して盛遠い衣川を率立々々歸りけまとや更渡り斯ぞとい知らで逢夜の通路を忍びて來さる左衛門渡懋ぞい容姿をり戸をはと〳〵と呼門へ〻袈裟い慌て〻走寄り「おを待難ぞ恁地々々といはんとせ〻ゞ推匿み一室の内へ伴ひて然氣なく「幸ひ嫻々い今宵い留守でぞざんをもゑ責臨なされさら誰憚る事もなく酒でも進んと俟てゐをを御前い下地ぞでざんをさうあ「餘り夜風ぞの身にあたへ家を出しあに一盞給たてや「そんあら奴家ゞ琴の習演おん恩に聽さまふ歟「そをいよからふ毎い母者ぞ思憚して猫に逐れた鼠も同前今宵ゞ眞の寡見城卒快々々と現あを顔見る毎に泡出

る涙紛らせ爪琴を袈裟に引よせ搔彈し

歌　長のをと何思ひ々ん世の中は憂を見そるい性命之

「何思ひけん世の中の憂を見するは性命ありとはよう拵へた唱歌でいある「聞覺えた花の香甚ある人の作かい知ふぞ」その憂事を見そる性命を刀に挂て死ぬると死い佛よあらぬといひまとご寶事でおざんを歟「氣味の歹い佛にある歟あらぬ歟斫きて死ぐ事いなしそれを自家ゞ知べき歟

歌　をしや雲時の花の緣

「寔に果敢ある緣でいある「何人ゞ「ハテ此歌い花の緣よをに就ても案ぎるい迭に人視を潛合ひ心の妹背い變らぬ中でもまぐ興の夫婦にあらぬ女房ご先へ死で末來の緣い斷ぬかへ「吁氣のめいる百般の事と問ふ人でいある「されゞとよ人間い老少不定とやらん恁いふ奴家ご御前より先ゐ死ぬまいものでもなし倘死んざらどう做たまふ「ハテ知をし事削髮〳〵「ヲヽそをい眞實うへ「眞實も眞實法恩謝德と剃わいやい「吁有がさし丞しと我を忘きて攜りつきよ〳〵とだかりよ泣淪めゞ「是い興ご醒る今も死でもくやうよ「まぐ御前よ名殘ゞ「呵呀

歌　名殘を雲に吹とぢよ

「ヲヽ忌々しい泣る〳〵ので吻と退屈且お暇をヤさう歟「みを俟さまへ誤つた「俟と駐るい最う泣ぬの「何にも悲しい事いおいもの泣きいせぬ「そんおら留つてやらふかい

歌　留て甲斐ある花の香を袖ゐ裹めど小竹葉の霰之はをやをさよ我泊

折しも響く夜半の鐘肝よおさもる悲しさも冥途の迎と胸を居「アレ那鐘ゞ九牌今宵い氣を易小室で終夜物語ふん



御前い先へ「然らぞ寢房温先て置ヤさん必俟せたまふあと笑顏莞爾と遣して奥へ入る容姿よをご今世の見納め歟と亂る〳〵心を把直し泣々急ぐ死淮備燈火弗と吹滅て常の寢房よぞ入りよ々る星も朧朧ゐ戀の闇遠藤武者盛遠い夜半の鐘を暗号にて迎とおぼしき鉄駕輿門首に舁居させ扃戸推開け潛入りつ搔撈々々探當りし件の麻環絲を去るべに一室の障子密と推開け鼻息窺ひ刀拔く手も最鋭く水も溜らぞ首搔刻り頭髻掴で聲高く「ヤア〳〵蝴蝶内侍のおん首遞與しヤさん御檢使是へと呼はをゞ駕輿の戸を颯と推開き立出る石田爲久潛挑灯指出し徐々と歩より「内侍の面体よく認知さる盛遠擊て遞與ゐ相違もあるまじ受拿たりと首桶を楚とだかりゐ收めた顏色悠々として歸行く斯と聞より燒火引提渡い奥より走り出をゞ襖推開げ蝴蝶内侍母も小薩を輾出「女兒袈裟い内侍さまへ性命の御用に立ました歟不便やと泣出をを「まれ〳〵伯母者最前還る沿途熟とヤわげ御得心よてい座さぬ歟それに今とり亂して嘆きたまはゞ内侍さまのおん心を痛め折角ゞし〳〵袈裟御前の忠義も無益よありまをぞやと嘸ざをよ〳〵とだかりに咽返る心を察して大家も俱に袂を絞りあへぞ渡いひとり找出て「吾素より内侍此家に潛居たまふよしを知らぞ甲夜より袈裟ゞ心得ぬ舉止合点もかぞと思ひしゞ原來内侍の替死ゐたつ所存ありし歟といふを盛遠推禁めて「否然にあらぞ長々しさ物譚ゐをども且聽をよ往る治承四年七月中の四日中納言光能卿密に吾を召れ平家の惡逆日に彌倍し万民の嘆大りたならぞ因て蛭ケ小島の流人頼朝に内通して兵を擧させふをを擊んと思へども明々地に文書を送るときい人の耳目ゐ觸んの怕あり汝書翰の文をよく覺え光能ゞ代書して頼朝よ遞與せよりしと仰けりけゝる是に於て吾三衣を纏ひ沙門に變しよく文を覺えよと御詞ゐりし文字をとり直よ文覺上人と假名して伊豆國よ馳下り頼朝よ彼書翰を遞與置て立歸れり有恁ゞ此盛遠いは弥ど著明き源氏の自方ゝ然るに父茂遠い平家へ傾

く志親子兄弟敵自方と相別れ合戰をすると本意あらぜ両氏よ從はぬ涙八の身とあらん爲渡邊の橋供養に袈裟御前へ無休の戀慕不所存ゝとて親れ勘氣を受け東國北國洛の合戰一たびも出會ぜ銷光し〻に往る日範頼公の陣所に于て國虎卿が計らひとして蝴蝶内侍を捜出せよと憑れしとい憑をしゞ然りとて平家の爲に戰死したまひし父茂遠の所存を察しおん性命助たく多方手段を運せども此處に御座わりとはや漏聞し石出爲久所詮替死あらぜしておん性命い遁きまじといひおごら袈裟御前に首擊れてたまはれとも明々地よいいひゞたく邪の戀慕に假托渡刀禰を手にかけるとあられぬ無休を實事と思ひ死ぬる覺悟にありたるも原はといへど皆まれ渡刀禰おん身ゞ爲の替死ゞや回向しく取らせたまへのしといはぎく渡い亡骸に拿携り「便あれものやとばりにて撲地と其首お伏艘び男泣に泣淪先ゞ内侍もいとゞ羨ましく「恁形あくあり果て夥多の人に苦勞と被科なきもの〻殺されーも咸自家もゑ未來の程も怕ろしやと嘲たまへゞ衣川も口にはいいね心には遣のたもなき悲嘆せり盛遠僧と横手を拍ち「忘をたり〻父は先ゞち妻にい後る適遣りし血涙の從妹袈裟御前を手よのゑしもいはれざる武士道を立るゞゆゑあり浮世の蘆に混はるも今日限りにあそと中刀拔て頭髻弗と斷拂ひ「先年伊豆よ下りしと兄假に命たる文覺上人是より直に眞の法名我に先ゞつ人々れ菩提を弔んと投出せゞ渡も涙推禁め「いと殊勝あり佛道修行の文覺刀禰へ心ゞかりの我施物内侍のおん伴して西國に馳下り御一門の御手に遞與さん「その志い忝れど今ゞた妻を失ひし渡刀禰内侍さまとの二個連人の疑うしろ先たし此義いいのにといとれて渡い莞爾と頷き「實過てり〻〻素より袈裟にいひ約し容姿易るい遁時ありとおあじく中刀拔て頭髻を根より斷と「我も菩提の門に入り平家のおん爲妻の爲大佛殿を建立の施主を勧る觀進帳佛法後に說乘る文字を取て俊乘坊名は源の氷清さ法を重祢て重源と命





ゆさんと手快く身裝整頓て内侍を守護して立出ゞゞ母い迹に引遁り袈裟ゞ亡骸をいとゝ寧に葬りしゞ今に存そる鳥羽の戀塚といふい即それ古跡あり恁て渡入道重源い恙あく西海に下着内侍と宗盛よ引遞與しそをよりその身い諸國を勧進して佛殿を建立そると其力少からぜ衣川も亦後に剃髮して大往生を得たりしとぞ

## 第五回　布引の瀑布籠

文覺い出家の後大願を發し荒行の苦を積んとて攝津國に赴き布引瀑布にその身をうたせ降來る氷の勢劇しく面を向べきやうもなけれゞ文覺い些とも怯まぜ瀧壺に浸さるゝと己に一七日尙此うへは那智の飛泉に赴んとゝ浩處に麓路のかたより石田判官爲久左大將國虎を先ゝたて勢込で馳來り「ヤア文覺の賊禿汝よくも隱首を吃せしな爲久ゞ面晴に國虎公を同道した卒尋常に繩被れと敦圍暴く罵れゞ文覺瀧壺より跳出「その折吟味ひろがへで時過ての隱首呼はり傍痛し文覺ゞ斷食の刀試し數にも足らぬ乾鮭奴捫片端から氷に浸して熱腸を冷んと大手を廣げて衝立ゞ「腮叩せぜ擊捕と主從競ふて打く蒐るを文覺い中るに任せく狗兒の如くに投つくをば「まは克はと國虎い眞先蒐く逃出そに引誘れて夥兵捫も忽地潑と逃散たり然れども爲久一人は有繋よ引返し物をもいはぜ引組先ば文覺莞爾とうち笑ひ「一旦刀い樂たれども心に念ぜる阿字の一刀三禮せよと拳を固めて磴と打つ打れく怯ひを搔捫み瀧壺眼被て投込めゞ潑と立たる水烟と共に性命は消にけり當下俄に人馬の音しく範頼郎黨に國虎を引立させて走來たまひ「私の擊動多兄左大將いづれ群卿の僉議を伺ひしうへ左も右も處分あらん和法師い心の隨にとゝ云りゝをゞ文覺は「いで貧僧は是より那智の瀑布に籠らん然ふゞかりに告辭して立別れしゞ爾後種々の難行の功を積みてその名高く高尾の文覺上人とて今に至るまで兒音走卒の口碑に遺るとはありぬ

文覺上人昔々物語卷上終



## 文覺上人昔々物語卷下

### 小引

予嘗て管見とする所の諸書を參考して文覺實傳料一卷を輯錄せしかど淺陋寡聞にして固より以世の公にするに足らざれば筐底に藏とること數年あり頃者春江來りて偶まれを搜出し且曰らく僕院本の要を摘て修選とする所の一書あり僕が修詞の拙劣なる言を俟ざれども脚色の巧妙なるは亦後人の企及べき所あらざる彼書と此編を合して一部とあさば蓋世の嬉劣を虛より實に導き浮より有ふ誘ふの一端あらん徒に盜魚の肚を肥とかはと勸ること甚切なり予己を得ず一夕燈を挑て校正一過してこれに附す素より大方の君子に示さんとにはあらざ聊以童蒙の惑を解とあらば予が幸甚のらんのみ

松村操識

### 文覺實傳料

**綱** 文覺氏は遠藤○前名は盛遠○左近衛將監茂遠の子あり

**紀** 茂遠○源平盛衰記には盛光に作り遠藤系圖には爲長○元享釋書には持遠とあり今は平家物語諸本に從ふ

**綱** 褫裸にして父母を喪ひ長ずるに及び趫悍にして武藝に精し

**紀** 源平盛衰記に曰文覺は渡邊黨に遠藤左近將監盛光が一子也其母未子あし夫妻其に家の絕あん事を歎て長谷寺の觀音に詣て七個日祈ありけるに左の袖に鳶の羽を給ると夢に見て懷姙して儲たる子也父は六十一母は四十三にて生たる一男あり母は難產して死ず父赤子を抱て歎きける程に事の緣ありける上便宜の方人にもと思

て丹波國保津庄の下司春木二郎入道道喜と云者發之けるこの三歳の時父盛光も死にけり堅固の孤子也けれども血の中より手馴たれバさとこの拾雖して道喜育々り面張牛皮の童にて心しぶとく聲高にして親の教訓をも聞き人の制止事をも用ゐ庄内の童を催從へて野山を走田畠を損し馬牛を打張目に餘たる不用仁也けれど上下いのゞせんと持醉たり十三に成ける年一門に遠藤三郎滝口遠光と云者呼寄て元服せさせて烏帽子子とも父盛光ごの盛を取烏帽子親遠光ごの遠を取て盛遠と名を付く少より時々物狂しきの氣ありけり容顔は勝ざりけれども大の男の力強く心剛也武藝の道人ふ勝て道心もさとこの在けるとかや常には母ごの難産して死にける事を云て泣父が事を戀て悲む

**綱** 仕て上西門院北面となり又院武者所とある

**紀** 源平盛衰記に曰父が跡を追て上西門北面に參る○長門本平家物語に曰院武者所とも爲りぬ摘要

**綱** 年十八にして感る所有て削髮して僧となり名を文覺と更む

**紀** 平家物語には十九の年道心發し髻切とあれども今は盛衰記に十八とあるに從ふ○源平盛衰記に曰文覺道心の起を尋れバ女故也けり文覺がため又内賊の姨母一人あり其昔事の縁に付く奥州衣川に有けるが歸上て故郷又住一家の者ども衣川殿と云若く盛んなりし時はみめ形人に勝心ばへあさましかりしが今は盛過て世中も衰へ寡にて物さびしき住居也娘一人あり名をば阿都麻とぞ云ける去共衣川の子あれバとて異名には袈裟と呼親に似たる子とて青黛の眉渡丹華の口付愛々敷桃李の粧芙蓉の眸最氣高して緑の簪雪の膚楊貴妃李夫人は見給バ不知愛敬百の媚一も闕き中十四の春を迎たり榮花名聞人々我も〳〵と心を通き

る其中に並の里に源左衛門尉渡と云一門也けるが内外に付て中々をバ恥しからぬ事ども〳〵を遣を互の心不淺しく早三年に成りぬ女今年は十六之盛遠は十七に成々るが其年の三月中旬に渡邊の橋供養あり盛遠紺村紺の直垂に黑糸威の腹巻に袖付く折烏帽子係にかけ銀の蛭巻二節通しく巻たる長刀左の脇にはさみ其日の奉行しけれバ壮々固たる兵士共下知し廻しく橋の上ゑ立渡也〳〵しく〳〵しく有ける供養既に終て方々へ下向しける中に北の橋爪より東へ三間隔て有ける樓敷の内より女房達あまた出て下向しける中に十六七にもや有らんと見もる女房輿に乘らんとて簾を打舉けるを見れバ世又有難き女也盛遠目くれ心消て何くの者やらん何ある人の妻子あるらんと行末見たく思けれバ興又付て行程に並の里に渡と云者が家に見入たり是は聞えし衣川の女房の女や過失なき美人也けり如何そべきと春の末より秋の半まで臥ぬ起きぬぞ案じける思澄して九月十三日のまゞ朝母の衣川が許に伺行則刀をぬき無是非母が立頸を取て腹又刀を指當て害せんとも女うつゝ心あし能々見れバ甥の遠藤武者盛遠也盛遠目を大又みとりて伯母あれども我を殺さんとしたまふ敵あれバ通そゝと只今殺さんとて腹又刀をひやく〳〵と差當たり姨い肝魂もあし雖人の中ぞ我寡にして夫あし和殿又於て意趣なし思ひよらぬ事をも宣ふ哉是い何ある事ぞやと中盛遠い人の中に非き袈裟御前を女房又せんと内々中侍しを聞たまとも渡ごの許へ遣しされい此三個年人去きを戀に迷て身い蟬のぬけがらの如くに成ぬ命い草葉の露の樣又消あんとも戀にも人の死ぬものかは是はそ姨の甥を殺したまふあれといふ衣川い責ての命の惜さにやけるい旁中も中に角といい聞しか共さまでの事とも思ひきを身貧あれバ何方共思分ざりしを渡ごの如して取しかバ力あしのほどに思ひきまとゝ安事也刀を納め今夕呼て見せんと云盛遠い尊閑又口を堅めてい惡かり

おんと思て今夕參らんとて歸にげり衣川い涙を流し案廻して娘の許へ文をやる娘消息を取上見て胸打騒女の童一人具して假初に出る樣にて母のもとに來れり母つく〳〵と娘の顏を見てとら〳〵と泣て云今朝盛遠ごの來て樣々振舞つる事共有の儘よ云つゞけて此事いりあも盛遠ゞ思の晴ざゝんにい我終よ安穩あるまじ去ばと て渡ごの心を破らんとよも非ぢ由あき和御前故よ武者の手わ係て亡んよりい憂目を見ぬ前に和御前我を殺したまへととてさめ〳〵と泣娘あれを聞て實よ樣あき事也心憂事哉と不斜歎けるごつく〳〵是を案して親の爲にい去ぬ孝養をもそる習也御命に代り奉ふんと思ひ定さり日も既に暮ぬ盛遠い獨咲して髮の毛ゝ〻げ髭をあで色めきてはや來て女と共に臥居たり別るゝよ及び盛遠刀を拔て嗚呼今い世の亂ぞ思儲し事あれば會ぬる後く命くらべ和御前のためにい命も惜からぢとて惣じて思切さる氣色也女良案しく云々るは實も前世の契にあそ侍〻先去ゞ我思ふ心を知せ奉らん只思切て左衛門尉を殺しさまへ互に心安からんといふ盛遠悅色限あし謀といりよと問へば女ゞ云我家に歸て左衛門尉ゞ髮を洗とせ酒に醉せて內に入れ高殿に伏たらんにぬれたる髮を搜て殺したまへと云盛遠悅て夜討の支度しけり女家よ歸り酒を儲渡に强我身も飲たりけり夫をば帳臺の奥にかき臥て我身い髮を濡〻さぶさよ取て帳臺れ端に臥て今や今やと待處に盛遠半夜計に恐やうに紛らひ寄ぬれたる髮をさぐり合て唯一刀に首を斬袖に裹て家に歸りけり爰郎等一人馳來て申樣不思議の事あそいへ何者の所爲やらん今夜渡左衛門殿の女房の御首を切進て侍る程よ左衛門殿は口惜事ゝとて門戸を閉て臥沈たまへりと披露あり耳にと御渡りいまじきやらんと云ければ穴無慙や此女房ごの夫の命わ代りけるよこそと思て首を取出して見れば女房の首ゝ一目見より倒伏音も不惜叫けり明ければ尊常よ出立て渡ごの家へ行たれば門戸を閉て音もせぢ盛遠門を叩て云女房の御首切てい奴を聞出してかしこへ打向つゝ搦捕て參つる程よ遲參仕い急ぎ門を開たまへと云ければ歎の中よも嬉くて門を開て入れたり盛遠い走寄御敵具して參たり先御首御覽せよとて懷より女房の首を取出して盛遠ごの所爲也和殿の頸を搔と思たれば係事を仕出したり疾々切たまへとて頸を延てぞ居たりける渡かぼどに思はん人の頭を切に及ぢぢ是も然べき善知識にこそ有けめとて自刀を拔て先髻を切てけり盛遠是を見く渡を禮拜しく是も髮をぞ切くける衣川の女房も尼に成く翌年四十五にく往生を遂にゝり渡い剃髮の後渡阿彌陀佛とぞ申ける遠藤武者も入道しく在俗の時の盛をとり盛阿彌陀佛と云けり後よ改て文覺といふ○袈裟ごの事い漢土東歸節女の故事を取く當時好事者の作設々〻小說なりとく疑ふ者多し其事蹟實に相似たり然れども古今の學士もこれを實事とし烈女を語れば必先袈裟を舉げ今い万人一口稱賛とる所なれば敢く堙晦に附そるわ恐ぢ爰よ錄ぢ世或い云烏羽戀塚は袈裟ごの古蹟なりと稱れども實い然らぢ戀塚い男女眷戀の謂よわらぢ即鯉塚の義わしく往昔大鯉ゞ瘞むる所ありと或い然ふん

**綱** 勤修勇猛ふしく備よ難楚を極む

**紀** 平家物語に曰文覺修行よ出んとしけるごの修行と云いいか程の大事やらん樣て見んとく六月の日の草も颯ごぢ照さるよ或片山里の藪の中へといり裸よ成仰のゝよ臥此ぢ蚊ぢ蜂蟻など云毒蟲共ゞ身よひしと取付く刺喰あどしけれども些も身をも不動七日迄い起も揚らぢ八日と云よ起上りく修行と云い是程の大事やらんと人よ問ば其程あらんよい爭り命も可生と云問さくい安平ござんあれとく聽く修行よこそ出よけれ熊野へ參り那

智籠せんとしけるゞ先行の試に聞もる滝に暫うゝをく見んとく滝本へこそ參々を比と十二月十日餘の事
あるを雪降積るつら〳〵いく谷の小川も音もせぬ峯の嵐吹凍り滝の白絲垂氷と成く皆白妙に押並く四方の梢も
不見分然るに文覺滝壺に下混り頸除渡く慈救呪を滿けるゞ二三日こそ有けき略中角く三七日の大願終に遂しの
ゞ那智ゝ千日籠りゝ大峯三度葛城二度高野粉川金峯山白山立山富士嶽伊豆箱根信濃の戸隱出羽の羽黑惣じ
く日本國殘所なく行廻るゝり

**綱** 骨神護寺を修せんと欲し化疏を持く法住寺に詣り殿庭を驚掇しく遂に獄に下さる

**紀** 平家物語に曰其後文覺ハ高雄と云山の奥に行澄しくぞ居たりける高雄に神護寺と云山寺有久く修造無
りしゝゞ大に朽破をたり文覺如何にもーく此寺を修造せんと思ふ大願を發し勸進帳を捧く十方壇那を勸化
ゝるく程に或時院御所法住寺殿へぞ參じさる御遊の折節にく奏者此由を申入れ文覺御坪の内へ破り入大音聲
と揚く勸進帳を引攤て高らかにこそ讀さりゝゝ院中の早ゝ男の者共我先に〳〵と進出ける中に平判官貢行
と云者進出て何者ぞ狼籍ゝとう〳〵罷出よと云けれゝ文覺高雄の神護寺へ庄を一所被寄ざふん限ゝい全く出
まじとて不動寄て外頭をつかうとそれゝ勸進帳を取直し資行ゞ烏帽子をはさと打て打落し拳を强く握り胸
をはたと突て後へのけに突倒そ其後文覺懷より馬の尾で柄卷さりける刀の氷の樣なるを拔持て寄來者を突
とこそ待懸たれ爰に安藤武者有宗其時當職の武者所にて有けるゞ何事ぞとて太刀を拔て走出さり文覺悅て
飛で懸る安藤武者斬ては惡かりなんとや思ひけん太刀のむ弥を取直し文覺ゞ刀持さる右の肘を健に打撲を
て些疼所にえさりやゝをうと太刀を捨てぞ組ぐりける互に劣らぬ大力ながら上に成下に成覆合ける所を寄



集ゝて拷してけゝ中略此法師奇怪なゝ禁獄せよとて禁獄せらる參取源平盛衰記

**綱** 赦に遇て出れども憤怨譏刺、顯憚そる所なし竟にこれに座して伊豆に流さる

**紀** 源平盛衰記に曰其比美福門院隱させさまひて大赦有しゝゞ文覺程なく赦されけゝ先非を悔て暫と引籠
ても在べきに尙もしひを勸進そる事如元中略京中白川大路門人の集ゝさる所にてと淺增くいま〳〵しき事を
のみぞ云ける公卿僉議ありて此僧を京中に置ても惡しゝゝとなんとて伊豆國へぞ流さをける摘要

**綱** 既にして伊豆に至ゝ奈古屋寺に居る前右兵衛佐源頼朝亦謫せらをて伊豆に在ゝ文覺是に說て兵と擧しむ

**紀** 源平盛衰記に曰文覺配流の後籠居したる所をゝ奈古屋寺といふ平家物語文覺我目出たゝ相人也と披露し
けれゝ事を御堂詣によせて男女多く入集て相せらる文覺の庵室と兵衛佐頼朝をの館とと無下に近程えけれゝ
藤九郎盛長を以先文覺ゞ弟子に相照と云僧を被招けゝ中略佐殿盛長を召具して文覺が庵室へ渡たまふ中略文覺佐
殿の前に出合く御邊い故下野殿の三男とこそ見奉れ歳のかさあるとて以の外にくまゝ給けゝ糸惜々々とく
やゞのくとら〳〵と泣く切く繼たる樣に强に畏て禮儀しけゝ中略文覺重てゝけるい源平兩家い相互に一天の
守護四海の將軍たゝき而に太政入道一旦の果報に引れて天下を管領それども悪逆無道にして宿運既に尽たり
其弟共あまた有といへ共世を治べゝ仁あし今と何事の侍るべき御邊い大果報の後憑しき人と疾々謀叛を發し
平家を打亡しく父の耻をも雪たまへ運の開きたまへべき時至りたまへり急たまへ〳〵とゝ佐殿中略惡事なぞ思
寄ざる事えと宣へゝ文覺懷より白き布囊の少し舊たるゝ裹たる物を取出してやゝ佐殿是ぞ故下野殿の御首
よ法師獄定せられたゝし時世ゝ立廻らゞ奉らんとて盜たゝ死其進せんとくはら〳〵と泣けゝ兵衛佐殿是を

見給く一定とと知らざれども父の首と聞よりいつしかあつらしく思ひけゝ泣々是を請取く袋れ中より取出しく見給へまへを白眼たる頭と略中佐殿い頼朝勅勘を免さるゝしてい何事も其恐有べしと宣ふ文覺賊に思立給とゝ京に上り院宣をヤべしと云けれゞ佐殿い御免の院宣を給り平家追討の勅命を蒙ふと爭思立さるべし但御邊も勅勘の身といりゝと宣ふ文覺い忍て上洛そべきとて略夜ゐ紛て上洛と新都福原に參て院の近習者と前兵衛督光能と云人い文覺にと外戚に付てもりゝと其人の許よ行向てヤけるゝ伊豆國の流人兵衛佐頼朝ゐそ朝家の御歎を承て院宣を下給とるゐらむ東八箇國の家人催集て都に上り平家を亡し逆鱗をも休奉り國土とも鎮侍ゐんとヤ中略光能宣ひけるい頼朝左樣にヤらん事帝運の再堯舜の代に改らん事よそ嬉けれとて密ゐ御氣色を伺ひゝり然べき御事にやとて御免有けれと即光能奉く院宣を書く給にけり文覺是を給く上下向八箇日に伊豆に着略角く兵衛佐殿の許に行向く申けるい我此國へ被流罪事も高雄の神護寺造立の故と又院宣を給らん事も御邊の力にく彼寺をや造ふんといふ所存とさるを院宣を急ぎ給らんと思たゝと高雄へ庄園を寄進有べし唯所知を十餘所寄進しさまへとて紙硯取向略中佐殿鼻うそやさくと被思けれ共寄進狀を書判形を加て給ふ文覺さゝゞ院宣進つらんとて懐より文袋を取出し中ゐる院宣を進とる

**綱** 頼朝府を鎌倉に開に及び功を怙み驕侈ゐり遂よ神護寺を修造

**紀** 明月記ゐ曰大將軍府建ゐおよびて文覺寵遇ゐ誇り勢を弄して人を凌ぐと少うらを摘要元享釋書ゐ曰文覺遂ゐ神護寺を修造その結構頗る壯觀を極めたり又東寺を修し是亦土木を弱む頼朝ゐれを禮遇そること日ゐ隆あり

**綱** 平氏既ゐ滅ぶ維盛の子六代執ふる文覺營救して其死を免れしむるを得さり

**紀** 平家物語ゐ曰北條四郎時政い都の守護してゐとれけるゝ平家の子孫と云ん人男子ゐ於て一人も不漏尋出したふん輩ゐと所望い請ゐ依べしと披露せらる中略小松三位中將維盛卿の若君六代御前とて年も少し長しう坐を中略北條蒲冨谷を打囲中略六代御前御輿ゐ被召さまふ武士共打圍て出ゐけり中略乳母の女房攻ての心のあらを其邊を足ゐ任て泣あるく程に或人のヤゝるゝと是ゐと奥高雄といふ山寺の聖文覺坊とヤ人ゐそ鎌倉殿の由々しき大事の人に被思參せて坐けるゝ上臈の子を弟子にせんとてはしゝらるゝあをと云々をゝ乳母の女房嬉き事をも聞ぬと思ひ直に高雄へ罷入中略聖も無憖に思て事れ子細ゝ問たまふ中略角て聖六波羅に出て北條に逢ふを救ふ事ゐ文長けれゞ略を此下文覺頼朝に乞て六代の命六代御前を舁出し布皮しさて居奉る中略さらゞあれ斬を是斬れとて切手を擇ぶ所に爰ゐ墨染ゝ衣着たゝける僧一人月毛ゐる馬ゐ乗て鞭を上てゞ馳ゝゝる此僧程なく馳來ゝ急ぎ馬よゝ飛で下ゝ若君乞請奉さり鎌倉殿の御教書是にありとて取出を是によりて六代御前ゝ遂に免されてけり摘要

**綱** 正治年中不軌を圖り事洩れ佐渡に流され食せして死を時に年八十

**紀** 平家物語に曰建久十年正月十三日頼朝卿年五十三にて失さまひしのゝ文覺聽て謀叛を被起ゝるゝ上文に文覺陰に不軌を圖れゝを恐れて敢發せざるよし記せり忽に洩聞て文覺房の宿所二條猪熊ゐる所に官人共餘多被付て八十に餘て搦捕をて終に流されける○平家物語諸本ゐ隱岐に流さると記しさゝども今い帝王編年記○百錬鈔に佐渡とゐるに從ふ

文覺上人昔々物語卷下終

明治十六年六月十日出版御届

編輯人　新潟縣平民　松村操
東京神田區南佐久間町二丁目拾壹番地

出板人　廣島縣士族　岩崎好正
同神田區雉子町卅二番地

發兌元　嚴々堂

大賣捌

東京　稲田佐兵衛
同　山中市兵衛
同　丸谷善七
同　兎屋誠
同　法木徳兵衛
同　開新社
同　秩山堂
同　丸屋鉄次郎
同　滑稽堂
同　萬字堂
同　武田平治
同　千葉　高知　名古屋　長崎　横濱　西京　同　同　同　大坂　同　同　同　同
春陽堂　鶴聲社　自由閣　柳原喜兵衛　此村彦助　福井源次郎　伊勢梅　安中與兵衛　永樂屋東四郎　澤本駒吉　立眞舍
名古屋　小田原　仙臺　土浦　長野　上田　下總堺　八王寺　前橋　新潟　盛岡
石版舍　石壽堂　木村文助　柳旦堂　小桝屋喜太郎　堺屋武右衛門　高木直次郎　熊澤傳四郎　報告社支店　林富吉　澤田正助

其他各府縣書林繪艸紙店へも澤山差出置申候間御最寄ニテ御求願上候

特40
136

091488-000-0

特40-136

文覚上人昔々物語

松村　春風／編

M16

DBN-2457